



ニッポン 臨終図巻

ドクター和の

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

いやあー長かった。この5月8日で新型コロナウイルスの感染症法の位置づけが「2類相当」からようやく「5類」に変更となります。しかし繁華街などではもともとくにコロナは終わった感じが。一番そう感じるのは、タクシーがなかなかつかまらない時。コロナ禍に運転手さんが大量に辞めてしまい、以前より台数が減っているのも理由の一因でしょう。少し前までは、もっとタクシーが走っていたのに。そんなことを思う今日この頃、この方の計報が届きました。タクシー業界大手、黒い車体

304

第一交通産業創業者 黒土始



黒土始(くろつちはじめ)さんが4月17日、北九州市内の病院

で知られる第一交通産業の創業者であり、長らく会長を務めた黒土始(くろつちはじめ)さんが4月17日、北九州市内の病院で死去されました。享年101。死因は肺炎との発表ですが、年齢から考えて穏やかな老衰だったのではと推察します。黒土さんは1922(大正11)年生まれ。大分高等商業学校(現・大分大学経済学部)を徴兵のために中退。中国での兵役を終え、終戦後の1960年に5台の車からタクシー会社を始めました。当時は珍しかった

100歳までトップの健康術

無線を使って迅速な配車をしたことが評判を呼び、1980年代より、全国各地の会社の合併や吸収を繰り返して全国展開。たった5

台から8000台の保有台数を誇る日本一のタクシー企業へと成長させたのです。90歳を過ぎててもほぼ毎日出版社にいたという黒土さんが同社の代表権を返上したのはなんと昨年、100歳になってからのこと。93歳のときに怪我をしたことから代表権を返上していましたが、95歳のとき「回復した」と自ら申し出て代表取締役に戻ったというから驚きです。無

論、周囲のサポートがあつてのことでしょうが、95歳からもう一度、大企業を牽引(けんいん)しようという気力はアッパレとしか言いようがありません。さらに僕が瞠目(ごもく)したのは、100歳で代表取締役を退いた際に黒土さんがされたこの発言。「えらい人生短いな」この一言で、どれほどお元気であるかがわかります。100歳を超えて生きる人は珍しくなりました。昨年の調査では、全国の100歳以上の人は9万人を超えており、52年連続で過去最多を記録しています。ちなみにそのうち9割弱が女性。男が100歳を超えるのは至難の業なのです。そして仕事が続けられるほどお元気な百寿者はごくわずか。「早くお迎えが来ないかな」と仰る人のほうが圧倒的に多いです。黒土さんは亡くなる約半月前の4月3日に入社式で新社員を激励しています。仕事を続けることが何よりの健康術だったはず。そして座右の銘は、「努力は天才に勝る」だったとか。寿命にも勝ったに違いありません。